



## 文化財への問いかけ

近年、防災の意識が高まっている。昔は地震・雷・火事・オヤジが恐怖

の象徴とされた。戦後「わいオヤジは姿をけした」が、今も地震と火事だけは健在である。

本徳寺の建築史を見てもそのことがうなずける。一七〇七年に宝永の大地震があり建物に大きな被害があった。江戸時代末期、一八五四年の安政の大地震では本堂が倒壊している。一五〇年周期でやってくる南海トラフの大地震である。すでにその時期は過ぎていく。いつ大地震が起ることもおかしはなない。覚悟せねばなるまい。安政地震から十四年後、本堂は再建されたが、明治元年一八六八年に火災で灰燼に帰した。今も昔も地震と火事の危機にさらされている。ことを肝に銘しておきたい。

消防署の主催で一月二十七日に消防訓練がある。毎年このことであるが、お寺で火災が発生したことを想定して自治会・寺内中が参加する。莫大な経費を要する自動火災報知器が主役の一日だ。本徳寺の建物はすべて木造である。一度火が

出れば貴重な文化財を失うことになる。失った物はもう取り戻せないのが歴史の鉄則だ。

よく考えれば人間の一生も建物と似ている。しかし、建物は人が作り出したモノだ。お寺は同行・門徒が仏法を聴聞し、仏徳を讃歎する場として建立された。だから、建物は潰れてもまた建ち上がる。文化財として保存することの意味は、建物を残すことではなく、建物を存続させて来た力を後生に維持することだ。と今、この気がついた。



本徳寺大門築地